

堺自然ふれあいの森

ニュースレター 第23号

発行：平成23年9月 OSS・EPRグループ(指定管理者)

イベント報告

今年も好評！
春のふれあいの森まつり開催

毎年恒例となった「ふれあいの森まつり」を今年も4月3日に開催しました。小雨が降る天気でしたが、48名の方が参加され、子ども達の元気な笑い声が園内のあちらこちらで聞こえる、とても賑やかな一日になりました。

開園セレモニーでは、ふれあいの森のシンボルツリーとなるシリブカガシを植樹しました。その後、グループに分かれ、シイタケ菌打ちやクラフト(竹やどんぐりを使った干支のウサギ作り)体験をするとともに、園内に自生するコナラやヤマザクラなどの142本の苗木を、駐車場北側の復元ゾーンに植樹しました。市民の手で植えられた木々が、将来、皆さんを迎える大きな森になることを目指しています。

シイタケ菌打ち



▲コナラの丸太に穴を開けて菌を打ち込みました。

クラフト



▲竹やどんぐりなどで今年の干支のウサギを作りました。

植樹



▲園内で採集し、育てた苗木を植えました。

堺エコロジ大学との連携

堺エコロジ大学(以下「エコ大」)は、様々な環境問題に挑戦していこうとする人材を育て、良好な環境を次世代へ受け継いでいこうとするものです。そのために、市民意識の向上とこれらを担う人材の育成を目的として、市民、NPO、企業、学校・大学、行政等の協働のもと、市民に開かれた環境学習の場を創出し、持続することを目指しています。

ふれあいの森では、5月にエコ大主催「堺の自然体験～森で学ぼう～」が実施されました。受講者はふれあいの森の概要や動植物に関する講義をはじめ、食物連鎖の仕組みが体感できるワークショップや、間伐した森の木を活用したアクセサリ作りを体験し、森と私達の暮らしとのつながりを学びました。

この他にも、里山保全ボランティア講座や環境教育指導者養成講座など、環境教育の要素が高いふれあいの森主催イベントの一部をエコ大の連携講座として登録しており、より多くの方が幅広く環境問題に取り組んでいただけるよう、今後も市民の環境学習をサポートできる企画を実施していきます。



森の館って どんなところ？



「森の館」は、森の情報がぎっしり詰まった公園のビジターセンターです。専門のレンジャーが、森の楽しみ方の紹介や森についての解説を行っています。館内には、見所を紹介する自然情報ボードをはじめ、楽しみながら自然について学べる展示もあります。

また、多目的トイレにはベビーシートを完備し、小さなお子様連れでも安心です。休憩にもご利用できますので、是非お気軽にお立ち寄り下さい。

森の館の楽しみ方(一例)

★図書コーナー

森で見つけた虫を調べたり、本を読んでちょっと休憩したり。畳敷きのスペースがあるので、小さなお子様も安心して絵本を読むことができます。



★ひみつBOX

森の葉っぱを使った「はっぱカルタ」や昔の遊びを詰め込んだ「むかしのおもちゃ」など、遊びながら楽しく学べるひみつグッズが箱の中にぎっしり入っています。



堺自然ふれあいの森での 里山の管理と活用



人が関わり続けることによって作られる里山の自然。身近な場所にありながら、様々な生きものを育み、人々の憩いの場となっています。

ふれあいの森は、「森の学校」をテーマに園内の自然を活かしながら、多様な生きものを育む里山の保全を行い、人と自然の関わり方や里山の文化について体験し、学べるよう、公園の管理運営を行っています。

自然とのつながりが希薄になっている今こそ、里山の自然を通して、私達の暮らしを支えている多様な生きものとのつながりや、自然が育む命の大切さ、人と自然の関わり方を学ぶ場として、里山公園の重要性が増しています。

調査

園内の動植物を調査し、どのように保全していくのか検討します。



森の整備

調査結果に基づき、エリア分けを行い、保全計画を作ります。目標とする森の姿にするため、木を選んで伐採したり、下草刈りを行います。



落ち葉かき

落ち葉の下に埋もれた植物の種の発芽を促したり、落ち葉を堆肥にするために落ち葉かきをします。



田んぼ・畑



田んぼのあぜ道では頻りに草が刈られることにより、背丈の低い草花が生える環境になっています。

伐木の利用

園路の階段や杭の資材、クラフトの材料として利用しています。昔は煮炊きをする燃料として薪や炭にしていたことが、ガスや石油、電気が使われるようになり、利用されなくなりました。



堆肥作り

集めた落ち葉を山積みにして堆肥を作り、田畑に鋤きこんで肥料として利用します。カブトムシが産卵するなど、生きものもこの場所を利用しています。



里山の恵み



生きものを育む



散策の楽しみ



体験・学習の場



収穫

ふれあいの森の里山の風景

雑木林



薪炭林として使われなくなり常緑樹が増え、暗い森になっていました。間伐などの整備を行い、光が入ることにより、明るい林床を好む里山の植物が育っています。

田畑



里山の景観作りや収穫イベントを通して、自然の恵みをいただいていることを学ぶ場所として活用しています。農薬を使わない田んぼの周りは、トンボやカエルが産卵し、育つ場になっています。

野原



定期的な草刈りにより、草原を維持しています。広場として利用するだけでなく昆虫やそれらを食べる鳥など、多くの生きものが生息しています。

湿地



底が深く、田んぼとして利用しにくかった場所が湿地として残されました。比較的浅い水深を好むスゲやガマなどの植物や水生生物の生息場所となっています。

溜め池



田畑に水を引くために山の斜面やくぼ地を利用して作られました。魚やトンボなどの水生生物や、それらを食べる鳥などの生息場所となっています。

ススキ原



ススキやヨシなどの草原を利用するカヤネズミの貴重な生息場所として保全するため、定期的なススキの刈り取りやセイタカアワダチソウの除去などを行っています。

里山が育む生物多様性

里山は人が生活の糧を得て暮らしていくため、自然に対して継続的に働きかけて作り上げてきた2次的な自然です。放っておけば常緑樹の鬱蒼とした暗い森となっていく場所を、多様な空間へと変化させ、維持してきました。そこには、薪や炭を作るための雑木林や農作物を作るための田畑とあぜ道、水を得るための溜め池や川、水路などがあります。

このような多様な空間が存在することにより、異なる環境を好む多様な生きものが生息できるようになりました。また、カエルやトンボなど成長過程において、異なる環境を必要とする生きものにとっては、里山のように狭い地域に多様な環境があることが欠かせません。

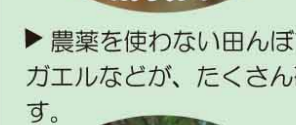
ふれあいの森にも環境省や堺市のレッドリストに記載される種などの多くの生きものが生息しています。継続的に人が関わり続けることにより、これらの生きものを守り育み、後世に残していくことは、現代に生きる私達の使命ではないでしょうか。

里山で育まれる生きものたち



カトリヤンマ

◀日中は林内で休み、夕方になると田んぼや川の上すれすれを飛んで、蚊などの小さな虫を食べています。



▶農薬を使わない田んぼでは、トノサマガエルなどが、たくさん確認されています。

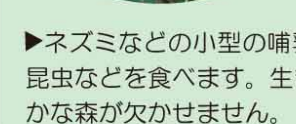


トノサマガエル



ササユリ

◀生長するためには5年以上かかり、定期的な草刈りが行われる明るい野原や林床を好みます。



▶ネズミなどの小型の哺乳類や両生類、昆虫などを食べます。生きていくには豊かな森が欠かせません。



フクロウ(幼鳥)

「里山」、あるいは「里山林」という用語が良く使われていますが、里山の意味は何でしょうか。里山とは燃料や肥料を採取するために、高木は30年から8年に1回の伐採、低木は数年に1回の柴刈りによって2000年以上にわたって持続的に利用されてきた樹林を意味しています。とすると、現在私達の周囲の山、丘陵、台地に残されている樹林は40～50年前までは確かに里山であったのですが、燃料革命によって柴、薪、炭などの生産に利用されなくなったので、里山とはとても呼ぶことができません。里山の定義の問題だけではなく、実質的にも50年間樹林が使われなくなって放置されると、樹林内に樹木の高木化、遷移の進行、つる植物の繁茂、ネザサの優占化などの変化が生じ、かつての里山とはまったく異なる外観をもつ里山放置林へと変化しているのです。

現在各地で進められている里山保全とは、実は、里山放置林をどのように管理してゆくのかということなのです。里山放置林を里山に戻せば良いというのは誰もが気がつく管理方法の1つです。里山に戻すということは樹木を伐採することから始まりますが、まずこの伐採の費用や労力が大変です。伐採できたとしてもこの材の使い道はほとんどありません。炭を焼いたとしても、また薪ストーブに利用したとしてもその量はごくわずかです。木質燃料による発電が進むならば、里山に戻すことも可能でしょうが、できたとしてもごく一部です。

里山放置林の管理の方向として里山に戻すということは現段階では現実的ではないことがわかります。それでは里山放置林をどのように管理すれば良いのでしょうか。

鋸やはさみを持って里山放置林に入る前に私達が考えなければならないことは、里山放置林をどのような樹林へと遷移させるのか、あるいは里山放置林の目標林はどのような樹林なのかということです。目標林が決まれば、その目標林に到達するように管理指針を決めて、それにそって管理作業を実行すれば良いということになります。

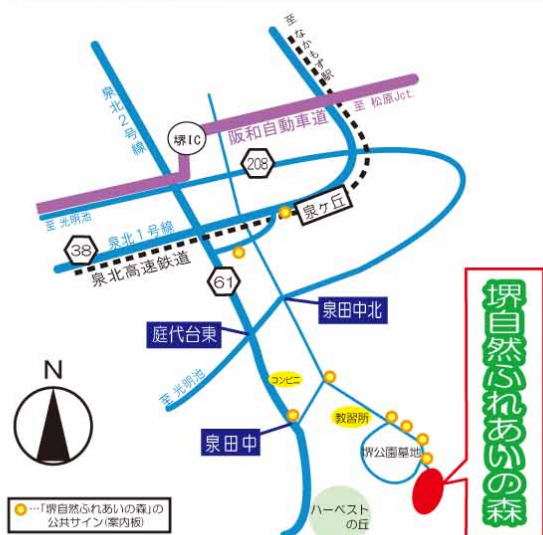
目標林は各々の地域ごとに様々なタイプが考えられますが、目標林の設定にあたって重要なことは樹林のもつ生物多様性保全などの環境機能、防災機能、文化機能を軸に環境林・防災林・文化林を目指すことです。

環境・防災・文化林では、夏緑型（落葉樹優占）里山放置林の目標林として、夏緑樹の優占する高木林を設定しました。現在遷移が進んでいるので、ササ類、常緑樹を伐採し、明るい林内となるように管理します。高木の落葉樹は伐採せずに、大木化させて高さ25mを超えるような大木林を目指しています。明るくなった林内には様々な植物が定着し始め、多様性の高い美しい樹林へと変化します。



写真提供：服部 保 氏

交通案内



● 電車・バスでのご来園

泉北高速鉄道「泉ヶ丘」駅 南側②番のりば(南海バス)
鉢ヶ峯行き「公園墓地北口」下車 約1,200m
※日曜・祝日は、堺公園墓地行き 直行便にて
「自然ふれあいの森前」下車 すぐ

● 車でのご来園

阪和自動車道 堺ICより泉北ニュータウン方面へ約7.5Km
公共サイン(案内板)を目印に お越しください。

●●●●● お問い合わせ・申込み先 ●●●●●

堺自然ふれあいの森 森の館

〒590-0124 大阪府堺市南区畑1740番地
TEL 072-290-0800 FAX 072-290-0811
ホームページ <http://www.sakai-fureainomori.jp>



発行：堺自然ふれあいの森 OSS・EPRグループ(指定管理者)

※OSS・EPRグループは、大阪ガスコミュニティライフ株式会社・株式会社生態計画研究所の連合体です。